

第54回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

ある老人の言葉と生命保険のこと

茨城県 聖徳大学附属取手聖徳女子中学校

二学年

福岡 はるか

「カネがないのは首がないのと同じだ。」

これは私の先祖、祖父の祖母が残した言葉だそうです。「カネ」「首」という生々しい言葉遣いにドキツとし、この世は金さえあればいいんだと言っているように受けとめられるかもしれません。しかしこの言葉が伝えたいのはそうではないのです。

この言葉の主はカンさん。明治時代に漁師の家で、八人兄弟の長女として誕生しました。幼い頃より父母を助け、弟妹を育て、漁を手伝い、家事に追われる日々を送っていました。当時漁師の生活は天候に左右され、漁ができなければ収入はありません。

「板子一枚波の上」といわれる漁の仕事は危険で、元気に出漁した人が帰らぬ人になることもよくありました。カンさんの生きた時代、まだ生命保険は普及しておらず、彼女は毎日死と隣り合わせの不安定な生活の中、家計を担いながら家族が安心して生活する術をあれこれと努力したそうです。船上は狭く限られています。仕事に必要なもの、いざというとき身を守るものは何かを優先的に選ぶ力が漁の出来ばかりか家族の生活を左右します。陸上生活でもカンさんは板子一枚の生き方を選びました。

毎日、生活において何をすることも今それが本当に必要か、まっ先に選ばなければならぬものは何かを問いつつ、やがて大家族が安心して、幸せになるくらしを手に入れたそうです。

「カネ」とは生きる為に必要な何より優先するものの例えで、備えのこと。

「首がない」のは生きていないこと。

「首がある」つまり、安心して、いきいきと安定した生活を送るには、無駄をせず必要なだけを優先し選ぶことをおこなわないようにすることなのです。

「カネ」備えは現代社会において必要不可欠です。人の生活はそれだけで成立しないのは東日本大震災や熊本地震などでみられた、人と人との思いやり、助け合いをみればわかります。カンさんは人にとってかけがえのないものの例えとしてカネという言葉を使っただけだと思います。

現代を生きる私の母は私が生まれたとき、色々な事態に陥り困ることがないようカンさんの教え通り私に備えをしてくれたそうです。私には、保険という目にみえない大切なよろいがあり、守られていることがわかり、うれしく思い

第54回中学生作文コンクール

ました。

清明・奉犬のマンガでよくわかる『生命保険って何だろう?』の中で、生命保険とは『私達のくらしの中には一家の働き手が亡くなったり家族の誰かが病気になったりなど、いつものくらしをおびやかす危険が身近に潜んでいる。それらの危険が万が一現実となったとき役立つもの』とされています。

これを読みながら、生命保険は、カンさんの残した言葉、「カネがないのは首がないのと同じだ。」のカネにあたるものと同じだと思いました。